

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第9回

宗麟が過ごした正月

大友宗麟は、どんな正月を迎えていたのでしょうか。

宗麟の長男、義統がまとめた「當家年中作法日記」には、大友館で行われた年中行事や儀式のことが記されています。

この日記によると大友館の正月は、元日(旧暦)から始まる諸侍の参賀が1月15日まで続き、翌16日から「評定始」。今で言う仕事始めとなります。

大友館が壮大な建物であったことを物語るエピソードのひとつが、1月29日に行われた「大おもて節」(大おもての祝い日)。



大友館の復元イメージ

鈴木慎一氏(県立芸術文化短期大学准教授)作成

大友館には西日本最大級の規模を誇る庭園や能舞台など、さまざまな施設が造られていました。

正月の祝い飾りが据えられた「大おもて」と呼ばれる施設に数多くの武士が列席し、会食が行われたのです。

この日は「遠侍」と呼ばれる別の建物での会食も含め500人分の膳が用意されたことから、大おもてには、少なくとも200人以上を収容できる大きな座敷が備えられていたと考えられます。

祝いの席に参加した武士たちは、大おもての近くにあったであろう舞台上で演じられる能を観賞。能が終わると、いよいよ宴会の始まりです。その様子は、さながら正月明けの大新年会といったところでしょうか。

宗麟が迎える正月は、一年で最も盛大に行われるイベントだったのでしょう。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639